

浜風会／入会募集中  
毎月第1, 3木曜日

# しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会／浜風会会報 No.10

## 篠原村の歴代村長

浜松市は、今年の四月一日に政令指定都市として生まれ変わる。そしてこの地区は浜松市西区となるが、この大きな分岐点に当たり、この地区の前身、篠原村の歴代村長をまとめてみた。

明治二十二年の市制・町村制の施行から浜松市へ合併の昭和三十六年までの七十二年間に左表

のように十五人の村長が歴任されている。

私達は幸い平和な現在にあるが、左表の出来事例にあるようにまさに激動の二十世紀前半であった。幾多の苦難を乗り越え、現在の篠原地区の形を作り上げて来られたことがわかる。

そういう篠原地区も浜松市へ合併して四十五年が経過した。新しい浜松市に相応しい篠原地区を目指していきたいものだ。

| 明治 22 年(1889)  | (村長)  | (出来事例)         |
|----------------|-------|----------------|
| 明治 22 年～26 年   | 鈴木直三郎 | 篠原村、馬郡村を合併     |
| 明治 26 年～30 年   | 鈴木喜平  | 消防組組織される       |
| 明治 30 年～34 年   | 鈴木直三郎 | 遠洋銀行設立         |
| 明治 34 年～38 年   | 〃     | 落花生米国博覧会で金牌    |
| 明治 38 年～40 年   | 鈴木喜平  | 役場が篠原字西前に移転    |
| 明治 40 年～43 年   | 鈴木信一  | 電話 7 箇所が開通     |
| 明治 43 年～44 年   | 堀内国作  | 篠原村青年会発足       |
| 明治 44 年～大正 3 年 | 石津芳藏  | (市制が施行、浜松市誕生)  |
| 大正 3 年～7 年     | 鈴木喜平  | (第 1 次世界大戦)    |
| 大正 7 年～11 年    | 高柳歌吉  | 篠原郵便局開設        |
| 大正 11 年～15 年   | 〃     | (関東大震災)        |
| 大正 15 年～昭和 2 年 | 〃     | 篠原小学校現在地へ      |
| 昭和 2 年～5 年     | 金原定吉  | (金融恐慌)         |
| 昭和 5 年～9 年     | 伊藤喜作  | 馬郡養魚場で越冬つばめ    |
| 昭和 9 年～9 年     | 鈴木敏一郎 |                |
| 昭和 10 年～11 年   | 堀内国作  | 篠原村婦人会発足       |
| 昭和 11 年～12 年   | 伊藤喜作  | (日支事変)         |
| 昭和 12 年～16 年   | 河合佐十  | (太平洋戦争)        |
| 昭和 16 年～20 年   | 〃     |                |
| 昭和 20 年～22 年   | 鈴木金作  | (日本国憲法発布)      |
| 昭和 22 年～23 年   | 高柳政司  | (義務教育 6・3 制実施) |
| 昭和 23 年～27 年   | 後藤将策  | 篠原中学校完成        |
| 昭和 27 年～28 年   | 〃     | (テレビ放送始まる)     |
| 昭和 28 年～29 年   | 相曾誠治  |                |
| 昭和 29 年～33 年   | 加藤末太郎 | 第 1 回村民体育大会開催  |
| 昭和 33 年～36 年   | 相曾誠治  | 新国道開通          |
| 昭和 36 年(1961)  |       | 浜松市へ合併         |

### 浜風会の平成 18 年度活動から

- ★ 山下孝先生講座
- ① 日本の残したい原風景  
伊根の舟屋、天の橋立 (京都)
- ② 世界の残したい原風景  
シェンブル宮殿と庭園 (ウィーン)
- ★ 自由研究
- ① 志都呂陣屋／大久保陣屋
- ② 家作に関する仲右衛門家文書
- ③ 雨乞い行事 (鈴木七兵衛家文書)
- ④ 日本の神道と神社について
- ⑤ 藤田家とゆかりの文化人
- ⑥ 万葉集について
- ★ 近郷のバス旅行→写真参照



掛川城／千代と一豊・掛川館('06.11.12)

# 藤田家(馬郡町)と ゆかりの文化人 その一

馬郡町の中ほど、東海道を北へ五十ほど入ると、旧家として知られる藤田権十郎家がある。地元の人には「権十さま」と呼ぶ。門には槇の古木があり、長屋門を配した広い屋敷など、そのたたずまいは歴史の重みと風格がある。母屋はかやぶぎの大きな家で、雄踏町の中村家住宅によく似た建て方で、豪農の大庄屋を思わせるに十分な構えであった。その後、新築されたが、その面影は今も残っている。

墓所は藤田家の近くで、旧東海道の南側にあり、樹木に囲まれた中に十代にのぼる歴代の墓が並んでいる。いずれも戒名は院居士・大姉である。藤田家には「藤田権十郎系図」がありその最初に、姓 小野朝臣 本国 武蔵 などと書かれている。

その昔、藤田家の祖先は武蔵国藤田郷を領したので、在名を負って藤田姓を名乗ったといわれる。代を経て室町時代後期、藤田重利には二人の子息があり、兄の重連、弟の信吉が所領を相続した。藤田家の本拠地とされる藤田郷近在は、現在の埼玉県大里郡や深谷市あたりとされる。兄は早く亡くなったが、弟信吉(永禄元年一五五八生)は沼田城主として、また甲斐の武田勝頼に属し能登守を称した。此の頃勝頼の兄、

海野竜宝の娘を内室として迎えたようだ。

信吉は、元和元年(一六一五)の大阪夏の陣に参戦しており、ある事件に巻き込まれる。その責めを負って信吉の子息の藤田重夏は、遠州宇布見村に蟄居の身になったとされる。重夏の子息の藤田彦左衛門は、大久保陣屋の服部家に仕え地代官を務めたようだ。

彦左衛門の子息が初代の藤田権十郎で、以来代々権十郎を世襲した。初代権十郎の子息らのうち、弟ら三人は馬郡の本家の近くに分家している。このことなどからみて、藤田家が宇布見から馬郡に転居したのは、江戸時代初期と思われる。

歴代当主の室(夫人)の実家はいずれも名家といわれる家柄で、同家の系譜を通して当時の旧家の人脈を知ることができる。また同家は江戸時代近隣の村々の新田開発事業を進めたり、浜松藩や志都呂陣屋などに多額の金子を御用達してきた家柄でもある。

藤田家やその分家からは、江戸時代から明治時代にかけて、各界で活躍した文化人を輩出している。六人の方々にについて紹介する。

## 藤田去草(文化五年一八〇八没)

去草の父は四代目藤田権十郎、母於登美(入野村竹村源四郎家より嫁す)の長男で五代権十郎を継ぐ。美喬、伊勢松、去草を名乗る。俳句をよくし俳人として国学者として名を残した。藤田家には、江戸時代に刊行された和本類が多数蔵されており、古書としても希少価値をもつものが多くある。その蔵書には、「遠州馬郡村伊勢松」「馬郡去草」などと所有者の名前が墨書されており、去草が歴代中で卓越した知識人であったことがうかがえる。東海道を上下する文人らが、情報交換、休息がてらの寄り所であったようだ。去草は育ちのよさから明るく鷹揚な人柄であり、また学問の鬼才と言われた。そして去草は晩年の賀茂真淵に入門している。

## 栗田高伴(天保二年一八三一没)

高伴の父は五代権十郎(去草)、母むら(島田宿橋爪助左衛門家より嫁す)の三男として生まれる。繁吉、武頼、一時道広という。のち、遠江国大居村(浜松市春野町)の素封家である栗田家に養子して、高伴と改名する。

国学者石塚龍麿に入門して詠歌、国学を学ぶ。特に万葉集の研究に励んだ。詠歌には「栗田高伴歌集」がある。遠州における国学者として、又歌人として名を残した。このように優れた人物で将来が大いに期待されたが、惜しくも四十才の若さで亡くなった。

(その二へ続く)

# 家作と村人の見舞(お祝い)

仲右衛門家の文書の中に小さな綴りがあり、表紙には『文政三年 家作入用併に見舞受納帳 辰極月』と書かれている。

この綴りには道具の売立も記されていることから、家の建て替えの時、不要の物品を売ったようであり、うす、わん、たみなどいくつかの品々と値段も記してある。また、建築の際に行う接待や行事の雑費も十数項目挙げられているが、建築そのものの材料費や大工たちの手間賃などは書かれていない。

家を作るにあたっては、近くの人、親類の人、当家と関係のある人などが、それぞれ米やあげ物等の食べ物や、なわも多く届けている。なわが家を作るのに役立つ材料の一つでもあり、各家で作りやすかったためでもあろうか。

下表の綴りの一部のように多くの人が届けていることは、当家の生活上の交際範囲が広がったものと想像できる。

江戸時代後期の村の風習として、このようなことが大なり小なり行われていたであろうことを示す一つの資料として紹介する。

資料の読解にあたって、浜松市立舞阪図書館の荒熊元茂氏及び浜松市史編さん室の鈴木正之氏より多くの援助をいただいたことを感謝する。

|      |       |
|------|-------|
| なわ三  | 八左衛門  |
| 〃    | 金右衛門  |
| 米壹升  | 弥右衛門  |
| なわ三  | 忠三郎   |
| 〃    | 権八    |
| 〃    | 助左衛門  |
| 〃    | 仁助    |
| 〃    | 小平    |
| 米壹升  | 惣右衛門  |
| 壹升   | 喜左衛門  |
| 壹升   | 八右衛門  |
| 壹升   | あげ    |
| なわ三  | 午之助   |
| あげ七枚 | 善次郎   |
| 米貳升  | 善兵衛   |
| なわ貳わ | とうふ一丁 |
| 米壹升  | 彦■    |
| 〃    | 庄兵衛   |
| 〃    | 孫右■   |
| なわ三  | 権三郎   |
| 〃    | 孫兵次   |
| 米壹升  | 太郎右衛門 |
| 百文   | 清八    |
| 壹升   | 佐五    |
| 右衛門  |       |
| 壹升   | 源左    |
| 衛門   |       |
| なわ三  | 角兵衛   |

|      |       |
|------|-------|
| なわ貳わ | 入口    |
| 同貳わ  | 源右衛門  |
| 同三   | 市之助   |
| 米壹升  | 太郎兵衛  |
| なわ三  | 儀左衛門  |
| なわ三  | 大ノ道   |
| 米壹升  | 源次郎   |
| 一升   | 馬郡村   |
| なわ壹束 | 弥次兵衛  |
| なわ一束 | あげ七枚  |
| 米貳升  | 弥次兵衛  |
| 米壹升  | 源八    |
| 五十文  | 市太郎   |
| 米壹升  | 太郎作   |
| なわ三  | 北山    |
| あげ七枚 | 六郎右衛門 |
| 三    | 半兵衛   |
| なわ   | 又蔵    |
| 三    |       |
| 同    | 十左衛   |
| 三    |       |
| 同    | 常右衛   |
| 三    |       |
| 壹升   | 松之助   |
| 〃    | 中     |
| 〃    |       |
| 〃    | 中     |
| 〃    | 市太郎   |

# 志を立てて郷関を立つ

会員 中山 清

慶応が明治に改元されてから間もない明治二年十一月「栄太郎」は坪井村で誕生した。幼少年期は両親の庇護を受け普通に成長したと思われる。十四才と言えは、これから多感な青年期を迎える過渡期である。生来向学心が盛んで、これからは東京へ出て勉強を続けたいという一念から、此の年の明治十五年上京を決行する。

上京以後、栄太郎は生まれ故郷へは帰らなかつたようだ。勉強優先の生活を続けていることそれに今と違って東海道線も開通していない当時の交通事情では帰郷は、思いもよらなかつたことが考えられる。

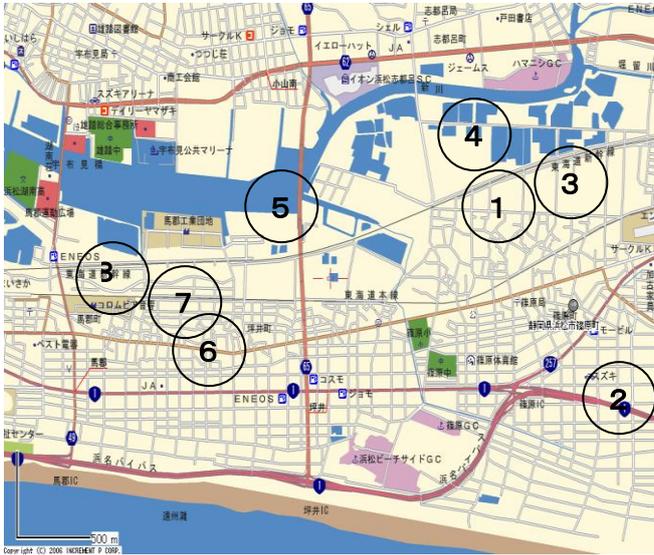
## 篠原町仲村遺跡

平成 17 年 5 月、市教育委員会により調査が行われた。場所は篠原市民サービスセンターより、北へ 500m、宅地造成に先立ち調査されたものである。

主な時代は奈良、鎌倉、室町、江戸時代。主な遺物は須恵器、土師器、山茶碗、陶器、磁器です。

篠原地区にはその他、今までに下図の遺跡が発見されている。仲村遺跡は①であるが、更に今後の発掘調査に期待したいところです。

- ①篠原町仲村、②八幡前遺跡、③上幸遺跡、
- ④中田尻遺跡、⑤坪井町浜名湖底遺跡、
- ⑥馬郡観音堂跡、⑦柳ノ内遺跡、⑧北浦遺跡、



ある時「学費が不足するので、金を送って欲しい」母親宛に懇願の手紙を出している。この時ドイツ留学が念頭にあったので、外国の文献など取寄せたりして研究費用がかさみ、生活費が足りなくなったのだろう。

お互いの消息は手紙の交換ですまされた。明治二十四年頃で両親宛の封書が保管されていたので、その内容の一部を抜粋したのが、次の手紙文である。

手紙文(文字と仮名遣いは原文どおり)

『懐旧ノ涙ニムセビツツ雨ニつけ風につけ  
思い出す八郷里の空ならぬハなし殊ニ旧曆盆  
會の折柄幼少の事など兎角亡き人につきて

あわれになつかしく ふとしたる事より子供遊びにも誉められし事叱られしことなど思い出して八涙の種ならぬハなし(中略)-----

勉強至極順序能く出来候 此分ニテハ二年相立子候へバ十分洋行ハ出来可申候只私ノ都合ハ宜敷ケレドモ父上母上ノ身上ニ付毎日心労致居リ候 私 洋行ノ上帰朝后即チ今日ヨリ四年ノ后ハ膝下シ孝養ハ盡スバクニ付

(中略)

尚以後ハ手紙可成封シニテ御遣ハシラセフ

九月二日 栄太郎拜

父上 御元へ』

(注 膝下一親のそば)

その後の中山栄太郎について  
自ら求めて苦学の道を選び、努力の甲斐あり、更に寄宿先の師の要望もあって留学すること二年、学位(医学博士)を得て帰国する。時に二十九歳であった。

これを契機に、若くして恩師の後継者となる。これは今迄の努力研鑽の賜物であり、以後の活躍は斯界にその名を残す。

その後の中山栄太郎について  
自ら求めて苦学の道を選び、努力の甲斐あり、更に寄宿先の師の要望もあって留学すること二年、学位(医学博士)を得て帰国する。時に二十九歳であった。

浜風会会報第10号  
浜松市篠原公民館同好会浜風会  
(篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)  
編集委員 鈴木清 鈴木義雄  
鈴木幹久 中山清 山下勝彦  
発行責任者 袴田亘一  
発行平成19年1月1日  
連絡先：篠原公民館気付  
TEL053-448-7859